

大学における中国帰国者子女に対する 社会的自立のための支援の検討

－ 卒業・就職内定者の事例報告を通して －

田崎 敦子
(東京農工大学)

1. はじめに

東京農工大学では、平成2年度から特別選抜入試により、毎年若干名の中国帰国孤児子女（注1）（以下「帰国者子女」とする）を受け入れている。しかし、彼らが日本の大学で学んでいくことは決して容易なことではなく、中には中途退学する学生もでてくる。

御園生・木村（1995）は、大学における帰国者子女の問題を取り上げ、勉学上の問題や家族の経済的・社会的問題、また日本語能力の問題について述べている。

本学は、平成3年度から本人が希望し、日本語・日本事情の担当教官が日本語能力を判定したうえで適格と認められれば、留学生の特例科目である日本語・日本事情を履修し外国語及び人文社会科目の単位にふりかえることができるようにしている。このように本学では、帰国者子女の共通科目（注2）履修に対する学習支援を行ってきた。入学後1、2年の期間に観察された問題点は既に報告されているが（御園生、1995、御園生他2名、1996）、その後3年次以上就職までの問題点は特に取り上げられていない。しかし、大学を卒業し、その資格を持って日本の社会に参画していく機会を与えることが特別選抜入試の主目的のひとつであろう。そこで、その目的がどのように達成されているかを調べるために、今回卒業、就職に関する調査を行った。

就職の際、帰国者子女が直面する特有の困難はあるのだろうか。もしあるとすれば、彼らはどのようにそれを克服しているのだろうか。また、卒業に至った帰国者子女にはどのような特徴が見られるのであろうか。本調査では、個別インタビューを通して卒業予定の帰国者子女の就職状況を明らかにすると同時に、彼らがどのように大学進学を決意し、進路の決定をしたのかを聞いた。その個々の事

例をもとに卒業・就職内定者に共通して見られる特徴を分析し、今後帰国者子女にどのような支援が必要なのか検討してみたい。

（注1）文部省による法律用語では「中国帰国孤児子女」となっているが、学生から改めてほしいという要望があり、また二世ばかりでなく三世も含んでいることから「中国帰国者子女」とした。

（注2）本学の学生に共通する授業科目で、将来の専門的深化と併せて、幅広い教養と総合的な判断力を培うための基盤となるもの（東京農工大学編「学生便覧1998」, p.54.）

2. 調査方法

対象者は、平成4年度に入学し、平成8年度に卒業予定の帰国者子女の中の5名である。あらかじめ対象者に調査の趣旨を説明し、同意を得たうえで筆者の研究室で個別にインタビューを行った。彼らの置かれている環境が大学進学に与えた影響を考慮するため、以下に挙げたような帰国後の生活状況や学習状況に関する質問を交えながら、各々の大学進学の動機、卒業後の目的が明らかになるようにした。

- ・ 帰国時の状況、年齢
- ・ 大学進学までの生活状況（学習、生活面において）
- ・ 大学進学の原因、本学選択の原因
- ・ 大学生活について（学習、生活面において）
- ・ 就職について（活動時の状況、会社、または職種選択の原因など）
- ・ 将来の希望

上記の質問事項を基本的なインタビューの流れとしたが、全体的には自由な対話形式で、特に調査票は使用せず対象者の発言に沿いながら話を展開し、彼らの率直な考えを聞き出すように努めた。インタビューの内容は筆者がその場で記述した。

調査時期は、卒業論文提出後の1997年2～3月、使用言語は日本語とした。所要時間は1時間程度を目安としたが、対象者によっては2時間以上積極的に自分の生活や考えについて話す者もいた。

3. 事例報告

事例 A (26 歳 女性)

A は、16 才の時に両親と兄弟 3 人と共に帰国した。当時彼女自身は帰国を望んでいなかったが、両親の希望で帰国に至った。帰国後は a 市の中国帰国者定着促進センターを経て、現在は家族で b 県に住んでいる。

父は日本で職を得たが、母は帰国以来病気で現在もほとんど外出することはない。自分は兄弟の一番下で唯一の女の子であるため、家では家事と母の看病をしてきた。中国ではすでに高校に通っていたが、日本での高校編入は許可されず中学 3 年に編入した。学力には自信があったが、言葉の問題で学年を遅らせることがとてもやすしかった。しかし、実際は中学でも日本語がよくわからず、特に国語や社会は全く理解できなかった。友人もほとんどいなかった。高校は帰国者の特別枠のある所を選択した。高校では、日本語にも徐々に慣れ、日本人の友人も増えた。自分が帰国者だということを隠すこともなく、特にそのことで差別を感じることもなかった。学習面では、語学の問題や中学での勉強の遅れの影響があり、文科系の科目は苦手で高校入学の時点で理系の大学への進学を決めていた。自分でも大学進学には強い希望を持っていたし、両親も勧めてくれた。帰国前から自立した女性になるために学歴は必要であると思っていたが、帰国後、両親の苦勞を通し経済的、精神的自立をさらに強く考えるようになった。両親は、帰国当初言葉も習慣もわからず、経済力もなかった。しかも、日本に来て母は病気になってしまった。このような両親の弱さを目の当たりにした時から、自分が両親を助けなければならないと常に心掛けてきた。

大学では、専門科目以外の社会学や文化人類学のような難解な文章を読まなければならないクラスに苦勞した。専門科目に関しては、興味もあり、友人とともに勉強したので問題はなかった。友人にも恵まれ、好きなことが勉強できた大学生活は大変充実したものであった。両親の経済的負担を軽減するため常にアルバイトはしていたが、大学生がアルバイトをすることは珍しいことではなく、特に苦に思ったことはない。

就職は、専門性を生かせる仕事内容を基準に会社を選択した。最終的に 4

社で面接まで進み、第一希望の会社に就職が内定した。面接で帰国者に関する質問は特になかったが、中国語はできるのか、中国に転勤することは構わないかということをよく聞かれた。今は専門を生かすことを最優先にしているが、将来もし仕事上中国と関係が持てる機会があれば、積極的に取り組みたいと思っている。その結果、転勤で一時的に中国に住むことは構わないが、日本の生活に慣れた今、将来中国へ戻るということは全く考えていない。

・考察

A は、明朗快活で、インタビューの際も常に笑顔を見せていた。日本語を書くことには自信がないと言っているが、話す面では問題ない。やはり、日本人の友人が多いためであろう。

帰国当初は、高校に編入できなかったことが不本意な上に、編入した中学でも日本の習慣に慣れていないことや言葉の問題から、友人もあまりいなかったようだが、高校以降は彼女の明朗な性格から良い友人に恵まれたようだ。また、大学進学の強い意志があったために、目的を持って勉強してきたことが感じられる。高校、大学を通して、日本人の友人と共に充実した学生生活を送ってきたことが、彼女に“帰国者子女”ということを特別意識させなかったのだろう。仕事の面でも、帰国者子女であることを肯定的に捉え、中国との関係も積極的に持とうとしている。

しかし、一方では帰国当初の不安定な生活や、帰国以来の母親の病気が A に大きな影響を与えていることも確かである。帰国前から自立を意識していたが、帰国後の生活においてさらに強く自立の必要性を感じたという。「日本に来て以来、自分が両親を助けなければいけないと常に心掛けてきた。」という言葉が彼女の姿勢をよく表している。

事例 B (22 歳 女性)

B は、12 歳の時両親と妹と共に 4 人で帰国した。小学校で帰国しているため、学年を遅らせることなく日本の小学校へ編入している。

日本語は、小学校の時、帰国者や外国人の子女のための日本語教室で勉強

した。中学入学の頃には日常会話はできるようになっていたが、中学の勉強、特に国語は全くわからなかった。予め国語の教科書を中国語に訳し、中国語で理解してから授業にでていた。友人もあまりできず、妹と過ごすことが多かった。

高校は、帰国者の特別枠で入学した。高校に入ると日本人の友人もできたが、自分は“帰国者子女”であり、他の日本人とは違うという意識は離れなかった。周囲の人に帰国者であることで特別視されたくなかったため、親しい友人以外にはなるべく帰国者であることを隠すようにしてきた。

将来いい仕事に就き、安定した生活を送るために学歴は必要条件だと思っていたので、大学にはどうしても行きたかった。両親も大学進学を望んでいた。中学の時から文系は苦手だったこともあり、必然的に理系専攻となった。東京農工大学に帰国者子女の特別枠があることは高校の先生から聞いた。

大学入学後も家庭の経済状況は決してよくなかったが、学業に専念するためにアルバイトはしないように両親から言われた。大学では、日本語のクラスを受講したことが大変役に立った。自分の日本語力の低さを再認識し、正しい日本語の書き方を学ぶことができたと思う。また、日本語のクラスを通して中国人留学生の友人ができたこともよかった。3年生で研究室に入るまで友人のほとんどは帰国者子女か留学生であった。彼らとは中国出身ということに気にすることなく、安心していろいろなことを話すことができた。研究室所属後は、日本人の友人もでき、日本語も上達したと思う。帰国者子女ということで差別を受けたことはないが、やはり自分は帰国者子女だということを意識し、その話題になることを恐れてきた。例えば、特別枠で入学したことが周囲にわかることを避けるため、入試の話題にはなるべく加わらないようにした。日本人学生に対し、自分が特別枠で入学したことに少し後ろめたさを感じている。

大学で専門の勉強が始まると、成績がよかった高校時代の自信をすっかり失ってしまった。大学の成績はかなり悪かった。周囲の学生との能力の差は大きく、絶望的な気持ちになったこともある。いくら勉強しても内容が理解できず、努力しても無理なことはあるということがわかった。結局、自分は帰国者子女であり、小学校の時から語学の問題や勉強の遅れがあるのだから、

成績不振は仕方のないことだという諦めもある。しかし、卒業できるかいつも不安で、自分なりに一生懸命勉強を続けてきた。

研究室では雰囲気は馴染めず、学生間の行事にもあまり参加しなかった。卒業に至るまでは苦しいことが多かったが、苦勞して学費を払ってくれた両親のためにも、就職のためにも必ず卒業をしなければならないと思い努力してきた。

就職活動を始めた頃は知名度のある会社を希望したが、活動を進めるうちにそれは難しいことがわかった。一流企業はやはり成績のいい日本人学生を採用したいと思っている。最終的には職種を重視し、希望した仕事に就くことができた。内定した会社でする予定の仕事では、専門性を生かせるだけでなく、営業等と比べ人との接触が少なく言葉の問題が影響しないですむ。言葉の問題が指摘されたり、帰国者であることが話題になったりすることはできるだけ避けたい。また、自分は技術者であり、貿易には興味がないため中国と関連がある仕事は特に希望していない。

就職活動を振り返ると、自分たちが帰国者子女だということが就職の際不利であったと思う。多くの会社は、必要があれば技術系の社員も営業や事務系の仕事に異動させることを考えているが、帰国者子女にはそのような人事ができないと会社は思っている。言葉の問題がある帰国者子女に、人と接触する機会が多い営業や事務系の仕事を任せることはできないからである。具体的には説明できないが、面接官の態度から察しても、会社は帰国者子女に対しどこか不信感を持っている気がした。しかし、これからはせっかく就職できた会社で一生懸命働き、両親に恩返しをしたいと思っている。

・考察

Bの日本語はまだ完全ではなく、語法の誤りや不自然なアクセントが目立つ。何より、日本語での会話には自信のなさを感じられ、話していて消極的な印象が残る。彼女が帰国者子女であるということや言葉の問題を常に意識していることの表れであろうか。大学での成績が思うように上がらないこと、周囲の人から特別視されていること、会社側から信頼感を得ていないこと等の理由を自分が帰国者子女であるということに結び付けてしまっていることから、彼女が帰国者子女

という立場を肯定的に捉えていないことは明らかである。

また、B は妹との相互依存が大変強く、インタビューの間も妹の話題がよく出た。「いろいろなことを相談できる妹がいたからがんばることができた」と本人は言っているが、姉妹に強い絆があったことが日本社会への適応も阻害していたということも考えられる。

このような劣等感や学習上の問題を抱え、しかも他者との交流にも消極的な彼女が大学に進学し、卒業、就職に至るまでには多くの困難があったであろう。しかし、卒業し就職することで大学進学を支援してくれた両親に恩返しをするという気持ちは強く、彼女は常に努力をしてきたのである。

事例C (25 歳 男性)

C の場合は、帰国者当人である父親が中国で病死している。その父親が遺言として、子供達の将来のために母親と子供 2 人で日本に帰国するように言い残していったことが帰国の理由であるという。

帰国以来、親戚を頼り母と姉の 3 人で c 県に住んでいた。帰国時は 15 歳であったが、中学入学は許可されず小学校 6 年生に編入した。日本語の理解度はひらがな程度であったが、友人と遊びながら覚えたため特に日本語で苦労したという記憶はない。しかし、母は日本語の習得に大変時間がかかり、姉と自分が通訳となり母を助けてきた。

いい高校へ入って、いい大学へ行かなければならないと思っていたので、中学時代に一生懸命勉強し、高校は帰国者子女の特別枠の制度のない県で一番の進学校に入学した。高校では日本語の問題も完全に克服したわけではなく、帰国者子女ということでもいじめられたこともあったが、自分が帰国者子女ということは意識しないように努めた。帰国者子女ということを自分への言い訳に使うことは甘えであり、決してしてはいけないと思ってきた。高校時代は新聞配達をしながら家計を助け、大学進学を目指した。大学を卒業し経済力をつけなければ来日の意味がなく、父の遺志にも反することになる。

大学入学後、アルバイトと育英会の奨学金で生活し、親からの経済的援助は全く受けなかった。日本語のクラスがあることは知っていたが、留学生や

他の帰国者子女の輪に入りたくなかったのであえて受講しなかった。言葉の問題もあり大学での勉強は難しかったが、他の人が卒業できるのであれば、自分にできないことはないというプライドがあった。問題は日本語力ではなく、精神力であると思う。せっかく国立大学に入ることができた機会を無駄にしたくなかった。

大学で最も有意義だったことは、大学の寮ですばらしい交友関係を持てたことである。そこでの信頼関係は大きかった。自分の日本語の誤りを指摘されても全く気になることはなく、自然に日本語を学ぶことができた。寮で協調性や上下の関係の大切さを学んだことは、今後も日本社会で働いていく中で必ず役に立つと確信している。

就職は、約 50 社に資料請求し、約 20 社と面接後希望の会社内に定した。面接では積極的に帰国者子女であることを述べ、中国と関連のある仕事を希望した。将来は、日本と中国の架け橋になるような仕事をしたいと思っているが、中国に戻るつもりはない。それは、子供たちの将来を日本に託した両親の苦労を裏切ることになるからである。日本で、日本人として暮らしていくことは既に決心している。

・考察

C は、子供たちの将来のために帰国を勧めた父親の遺言、そしてその遺言に従い日本で自分たちを育ててくれた母親の苦労に報いなければならないという義務感を持っている。日本で大学を卒業し、就職することは、彼にとってその一端を果たすことになるのであろう。彼の長所は、その大きな義務を自分の活力にかえていることである。生活上・学習上の困難はあるが、帰国者子女ということを使い訳にしたいくないという自尊心の高さが、彼を支えてきたように思われる。他の日本人と同等でありたいという気持ちから、語学力に不安を感じながらも日本語のクラスをあえて受講しなかったのであろう。

しかし、C は帰国者子女という自分の立場を決して否定的に捉えているわけではない。将来は日本と中国をつなぐ仕事をしたいという彼の中には、2 つの国、文化を背景にした現実の自分を認め、その能力を積極的に生かそうとしている前向きな姿勢が感じられる。

事例D (27歳 女性)

Dは、帰国前に大学で木材について学び、既に中国で将来設計を立てていたため帰国は望んでいなかった。しかし、政治的・経済的に安定している日本で、子供の将来のために新たな生活を始めようとしている両親の意志に従い、大学を中退し20歳の時両親と兄弟3人と共に帰国した。

帰国後最初の居住地は祖母の住むd県であったが、地方では仕事もなく、外国人として阻害されがちだったため、一家で東京へ移ることにした。しかし、東京での生活は決して楽なものではなかった。家族は誰も日本語がわからず、両親は日本語学校に通いながら働いた。長女である自分も家計を助けるために働かなければならなかったが、日本語力を必要としない職は限られ、収入も低かった。ウエイトレスや工員として働いた職場には外国人労働者が多く、誰もが自分の仕事を確保するために必死であった。特に日本の永住権を持っている恵まれた環境にある自分に周囲の目は冷たかった。この時期に、知識と技術を身に付け、自分にしかできない職を得なければ日本では生きていけないと感じ、大学復学を決心した。

東京農工大学の中国帰国者子女の特別枠のことは、立ち読みをした大学情報雑誌から知った。大学入学後も勉強とアルバイトに追われる日々であった。日本語の問題もあり授業を理解することは困難であったが、日本での生活や職場に慣れることに比べれば、自分一人の努力で解決できる勉強は全く苦ではなかった。

大学の日本人学生とは生活環境や年齢に差があり話が合わず、自然に日本語のクラスを通じて知りあった中国人留学生との交流が多くなった。その中で留学生には特別な奨学金などのサービスがあることを知り、日本人とも留学生とも異なる自分の置かれている状況の厳しさを改めて感じた。

大学入学後も家族の生活はまだ安定していなかった。母は体調をくずし入院、妹も新しい環境の中で精神的負担が大きく入院生活を送っていた。毎日悲しくて泣き明かしたが、学校とアルバイトを休むわけにはいかなかった。そんな時、精神的支えになったのは中国語教師のアルバイトであった。もちろん、経済的な理由から始めたことであったが、中国語教室は自分が大人と

して、そして知識人として扱われる唯一の場であり、教えている間は自尊心が満たされた。

就職活動は、まず自分の専門と中国に関係がある会社を選択し、履歴書を送ることから始めた。会社には自分が帰国者子女であり、言葉・文化面において中国と日本に通じていることを積極的に示した。しかし、“中国帰国者子女”という立場を理解できない面接官も多く、就職活動を通して日本における中国帰国者への関心度の低さを改めて認識した。最終的に希望の会社に就職が決まり大変満足している。しかも、会社は入社後の住居まで確保してくれた。この時自分が初めて日本の社会で正当に扱われた気がして、涙が止まらなかった。

帰国後苦しいことは多かったが、自分の可能性を試すことで人間として成長できたと思う。東京は競争が激しいが、様々なチャンスがある魅力的な所でもある。今後もこの東京で自分の力を生かしていきたい。そして、いつか結婚して、家庭を持つことが今の自分の夢である。日本で自分の家庭を持つことで、本当の日本人になれるような気がする。

・考察

Dは対象者6人の中で最も年上であり、帰国前既に中国の大学で専門の勉強を始めていたこともあり、帰国時には成人、知識人としての強い意識を持っていた。このため、彼女の自尊心は、言葉の問題を抱えながら年下の日本人学生と共に大学生活を送ることだけでは満たされなかった。Dは中国語教師という社会的地位のあるアルバイトにより、経済面だけでなく、精神面においても自分自身を支えていたのであろう。

家庭においても長女であるDは、両親を助け、家族を支えていかなければならないという責任を負っている。このような環境の中で、社会的地位のある職を得、経済的に自立することは、彼女が日本で生きていくためにどうしても必要であったことが想像できる。さらに、Dが就職を自立ということだけでなく、日本社会に受け入れられた証として捉えていることには大きな意味があり、帰国者子女の就職が彼らに及ぼす心理面での影響を考える上で注目すべきことである。

日本で職を得、家庭を持つことで本当の日本人になれるという彼女の考えの中

に、日本で安定した生活を確保し、この国を永住の地としたいという希望をうかがうことができる。

事例 E （22 歳 女性）

E は、14 歳の時両親と兄弟 4 人と共に帰国した。日本の生活が安定するまでは大変苦労したと言っている。E は日本で就職をせず、別の進路を自分の意志で決定している。

中国で教師であった父は教えることしかできないと思い込んでいて、日本での仕事はなかなか見つからなかった。やっと得た仕事も専門外であり、父は満足していなかった。母は病弱でほとんど外出できず、生活は決して楽ではなかった。

中国での学年を遅らせずに日本で中学 3 年に編入した。しかし、日本語は中国帰国者定着促進センターで学習しただけだったので、言葉の問題が大きく、中学での勉強は数学と英語以外はほとんど理解できなかった。高校は、帰国者の特別枠で入学した。高校 2 年生になると徐々に高校生活にも慣れ、授業も理解できるようになった。友人も少しずつ増えてきた。

大学進学理由は、興味のある勉強が続けなかったこと、また将来どんな仕事に就いても学歴は必要だと思ったことにある。両親も子供たちの大学進学を望んでいた。自分は女の子であったが、両親は他の兄弟と区別することなく大学進学を勧めてくれたし、兄弟も応援してくれた。もともと理系の分野に興味があり、進路はすぐに決めることができた。東京農工大学の帰国者子女の特別枠の情報は、帰国者のネットワークを通して得た。

大学に入学後、日本語のクラスで初めて日本語の文法、そして正しい日本語の表現を学び、日本語が上達したと思う。そこで同じ中国文化を背景にした中国人留学生の友人もできたが、彼らとは在日年数も状況も異なり、あまり話が合わなかった。同じように日本語を勉強していても、自分は留学生とは違う立場にいる。彼らは日本人になる必要はないが、帰国者はたとえ家族が中国文化を背景にしている、戸籍上は日本人であり、今後も日本人として生きていかなければならない。この違いは大きいと思う。

テスト前の勉強はつらかったが、それは学生がだれでも経験することであり、自分に限ったことではない。確かに言葉のハンディはあるが、それは大学に入って始まったことではなく、今までずっと抱えてきた問題であり特別苦労とも思わなかった。

就職活動では、大手の企業を 2 社受験したが失敗した。それ以外の会社で働くつもりははじめからなく、就職は諦めた。本来日本で就職するよりはむしろ日本を離れたいと思っていたので、大きなショックはなかった。帰国以来日本は常に外国であり、自分は外国人であった。そして、今でも日本語は外国語であり、自分の言葉だと思ったことは一度もない。特に帰国後も中国名を使用していたため、周囲から中国人として扱われることが多く、履歴書の名前を見てアルバイトを断ってくる会社も多かった。

日本以外の国で暮らしたいという気持ちは帰国した時から持っていたが、大学時代の後半にはさらに強く思うようになった。しかし、中国に帰りたいということではなかった。子供の頃暮らしただけの中国は今の自分には外国である。また、政治的、経済的に不安定な国には行きたくはない。単に近所に親切的な韓国人がいたという理由で、韓国へ行こうかと思ったことがある。日本と中国以外であればどこでもよかったのだ。

結局、卒業後は恋人のいるオーストラリアへ行くことにした。しかし、当分は結婚のことは考えず、オーストラリアで就職し、経済的に自立しようと思っている。オーストラリアを選んだのは、中国でも日本でも見つけることができなかった有意義な生活が得られるかもしれないと思ったからであり、恋人のことは大きな理由ではない。恋人にも、他の誰にも頼らずに生きていく力をつけ、経済的にも精神的にも余裕のある生活を送りたい。日本に帰国以来、誰にも頼ってはいけなく、頼る理由もないということを学んだ。実際、両親にさえ全く頼ることができなかったのである。しかし、日本へ来たことは後悔していない。中国ではできない経験ができ、視野が広がったことは大きな財産だと思っている。

・考察

E は、自分を日本人とも中国人とも思っていない。東京農工大学の帰国者子女

を対象にしたアイデンティティーに関するアンケート調査では、無回答を除いて、中国人であるとする者、日本人であるとする者、両者の中間とする者の三者に分かれるという結果が出ている。（御園生・木村，1995）ここで両者の中間とした者は、国籍を超え自分なりのポリシーをもとに築いた独自の思考方式や価値観、行動様式が自分のアイデンティティーになるという建設的な意見を示していた。しかし、E の場合は、日本と中国の間に存在する曖昧な自分自身を捨て、新たな自己を求めていると思われる。中国を住む場所として選択しない理由に、慣れない文化や政治的・経済的不安定をあげていたが、やはり自分の過去、家族に関わりのある中国では、新しい自分になることができないと感じているようである。また、オーストラリアでの経済的、精神的に余裕のある暮らしに対する強い願望には、日本でも中国でもない新しい場所で、自立しようとしている E の気持ちが影響しているのではないだろうか。「両親にさえ頼ることができなかった。誰にも頼れない、頼る理由もない。」という E の厳しい姿勢には、彼女の強い自立心が表れているといえる。

4. 就職内定者にみられる特徴

今回の対象者は各自積極的に就職活動を行い、自分で納得できる進路を決定するまでに至っている。インタビューの結果からわかるように、彼らは一様に日本での自立を意識し、そのための条件として学歴が必要だと考えている。無論、その背景には帰国後家族が直面した経済的問題がある。しかし、彼らを最も不安にさせたのは、頼れるはずの両親が言葉の問題を抱え、異文化の中で戸惑う姿だったのではないだろうか。対象者5名の内3名の母親は帰国以来病気がちである。なんとか職を得た父親も中国で身に付けた専門職を生かせず、日本社会に正当に扱われているとは思っていないようである。このような環境で育った彼らには、日本で社会的地位を得、経済的、精神的に自立することの価値は大きく、そこに家族が多くの代償を払った帰国の意義を見いだそうとしているのかもしれない。

しかし、帰国者子女がすべて卒業し就職できているわけではない。今回の対象者の前向きな姿勢はどのように養われてきたのであろうか。インタビューを通して見られた特徴のひとつは、中国的な家族の強い絆である。彼らは大学進学から卒業に至るまで家族の大きなサポートを受けてきた。両親は子供の将来に期待し、

経済的に困難であるにも関わらず大学進学を勧めている。中には勉学に集中させるためにアルバイトさえさせなかった親もいる。しかし、子供の方も支えられるだけではない。幼い頃から日本語が不自由な親を通訳となって支えてきた。そしてこれからも家族を支えていこうとしている。「大卒」という資格を持って自分たちが望んだ仕事に就くことは、経済的、精神的に余裕のある生活を可能にする。それは自分のためでもあり、家族のためでもある。彼らの自己実現は家族を支えることにつながっているのである。こうした家族の絆が、彼らの自立心を育ててきたのではないだろうか。

帰国者子女にとって就職は大きな目的であることがわかったが、心理的にはどのような意味を持つのだろうか。梅田（1995）が示した次のような求助ニーズの階層に照らして考察してみたい。梅田は、帰国者の日本社会適応における求助ニーズの推移を明らかにするために、マズロー（1970）が体系化した欲求の階層仮説（生理的欲求、安全の欲求、愛と所属の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求）をもとに、以下のような3つの段階を設定し、彼らに見られる11の求助ニーズを階層別に分けた。

〔求助ニーズの3ステージ〕

ステージ1 生活基盤を考える [安全の欲求]

「健康」「住宅」「日本語学習」「入国管理」

ステージ2 安定した生活を得る [愛と所属の欲求]

「進学」「職業技術専門学校」「国籍」

ステージ3 よりよい生活の展望 [承認／自己実現の欲求]

「職業」「資格取得」「資金貸付」「年金・保険」

梅田は日本社会に理解され受け入れられたと実感することが帰国者の「愛の欲求」であると捉えている。また、「職業」に就くことは日本社会の一員となり「所属の欲求」を満たすだけでなく、自立することで日本人や帰国者仲間の承認や尊敬、自尊心を得る「承認の欲求」を満たすことになるという。この欲求の階層の分類によれば、帰国者にとって日本での進学、就職は、日本社会に受け入れられ、承認されたことの象徴としての意味を持つ。事例にも見られた通り、彼らの学歴、

自立への強い意志は、こうした自己実現への願望につながっていると考えることができるであろう。

5. 今後の支援の検討

今回の調査により、共通科目における日本語・日本事情の履修による学習上の支援は高く評価されていることがわかった。彼らが専門課程で困難を感じているとしても、それは専門の内容であり日本語の問題とは捉えられていない。これは共通科目履修における学習上の支援が、その後の専門課程で自立学習ができる基礎を築くことができたためであると想像できる。

これまで大学は、特に帰国者子女の就職に対する支援を行っていなかった。今回の事例で、卒業、就職にまで至ることができた帰国者子女は、自立に対する熱意を持ってそれぞれ努力を続け、目的を達成していることがわかった。就職の際、帰国者子女であることが特に不利であったという事実もないようである。

しかし、大学に入学した帰国者子女がすべてこのように成功しているわけではない。実際、今回の調査の対象者である平成4年度に入学した帰国者子女の中には休学中の者がいるが、インタビューを行うことができなかったため、彼らが休学している理由はわかっていない。また、今後日本の社会的、経済的問題から就職が困難になる可能性もある。このような状況において我々は、卒業、就職に達することができなかった帰国者子女の個々の要因やニーズを調査し、彼らの自立につながる就職をどのように支援していくべきか検討する必要がある。また、就職状況が悪化した場合にも備えるべきであろう。帰国者子女が支援を必要とした時に、適切な情報を提供できる基盤を整えたい。例えば、他大学と連携した卒業生とのネットワーク作りや情報網の整備、卒業後の進路に関するデータ収集、就職に関する情報提供等のサービスの充実化が考えられる。東京だけでなく地方の情報も提供することにより、彼らの活動範囲を広げることができるであろう。そのためには、情報交換を行うためのサポート側のネットワークを作ることも必要である。帰国者子女にとって、大学進学が目的が達成されたことが形として表れるのが就職である。先輩が就職した情報は、在学中の帰国者子女にとっても大きな励みになるはずである。

帰国者の受け入れのピークが過ぎ、今後は彼らに対する長期的・継続的支援が

必要になると言われている。(佐藤他 3 名, 1997) 帰国者子女の特別枠を設け、受け入れを行っている本学も、入学から卒業後の進路に及ぶ長期的サポートを提供し、帰国者子女の日本での生活を支援していく必要があるだろう。

参考文献

- 梅田康子（1995）「中国帰国者に見られた求助ニーズの経年的推移」『中国帰国者定着促進センター紀要』第3号, pp.179 -193.
- 佐藤恵美子・池上摩希子・馬場尚子・小林悦夫（1997）「再研修および再研修カリキュラム設計についての考え方—成人教育の特性をふまえた長期的学習支援の可能性—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第5号, pp.1-29.
- マズロー, A. H. 小口忠彦訳（1987）「人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ—」産能大学出版部.
- （原著）Maslow, A.H. (1970) ‘Motivation and Personality, 2nd.’ Harper&Row
- 御園生保子（1995）「大学における中国帰国孤児子女について」『複数の言語環境を背景に持つ学生の高等教育に関する研究会』pp.7-8.
- 御園生保子・木村健二（1995）「大学における中国帰国孤児子女の現状と日本語教育 補論 大学における中国帰国者子女教育の成果と課題」『中国帰国者定着促進センター紀要』第3号, pp.165 -178.
- 御園生保子・田崎敦子・梅田康子（1996）「中国帰国子女の学習上の困難点について」『第2回複数の言語環境を背景に持つ学生の高等教育に関する研究会』pp.10-11.